

土建業界と警察、検察を結ぶ強い絆

「つくりごと 高齢者福祉の星 岩川徹逮捕の虚構」

秋田県鷹巣町といえば、トイレ付の個室ユニット型老健施設「ケアタウンたかのす」をはじめ、24時間訪問介護、無休の三食配食サービス、街中のグループホームなどを次々実現させ、わが国で最も先進的な福祉の町として全国にその名を轟かせていた。

1991年に町長に就任した岩川徹さんが築いた。介護施設の職員配置は入居者3人に対し1人が厚労省基準。ケアタウンでは1・5対1と2倍だ。全国初の手厚い試みだった。

在宅サービスで1割負担を上回ると、鷹巣町が一般財源から負担する「上乘せサービス」も導入、介護保険の高齢者支援策も突出していた。

首長が本気を出せば、ここまで福祉レベルを高められるという憧れのモデルであった。

3期12年続いた岩川福祉町政が2003年春から暗転する。

岩川さんが町長選で敗れたためだ。「福祉は身の丈でいい」とする新市長が介護予算を削減、グループホームは閉鎖、上乘せサービスも消えた。再起を期す岩川さんが09年に北秋田市（旧鷹巣町などの4町合併市）の市長選に挑むが落選、その直後に買収容疑で逮捕された。

福祉関係者に大きな衝撃を与え、その後の一、二審の裁判では有罪、現在最高裁待ちだ。

著者は「逮捕は虚構、事件は冤罪」「厚労省の村木厚子さん裁判と同じ構図」と断じる。すべての裁判の傍聴や警察の取り調べの裏付け取材をしながら、検事調書、裁判の判決文などを丹念に読み込み、いくつもの矛盾、誤謬を抉り出す。一審の馬場純夫裁判官、二審の仰木誠裁判長、布村希志子検事など実名を挙げての「糾弾」である。

「最高裁の裁判に間に合わせるため、わずか一カ月で書き上げた。記者生活（朝日新聞、週刊朝日記者）でもこれほど頑張ったことはなかった」と著者は振り返る。岩川施政への熱い思い入れがあればこそだ。

かつて、岩川さんに請われて虐待防止を目指す「高齢者安心条例」に関わるなど相当の肩入れをしてきた。

事件の背後に土建業界の存在が大きいとの指摘は、映画監督の羽田澄子さんが描いたドキュメント「鷹巣町福祉シリーズ」を思い起こさせる。

福祉と土木工事の予算争奪線だ。

事件現場の旧相川町が秋田県内最大級の土建会社「佐藤庫（くら）組」の本社地であり、その「旧相川町の本当の支配者は佐藤庫組経営者とする地元住民は大勢いる」と著者は記す。

土建業界と警察、検察を結ぶ強い絆にたどり着くわけだが、この構図は日本の各地で網の目のように張られていて、北秋田市でも例外ではなかったのだろう。

（大熊一夫著 創出版 1500円+税）

浅川澄一 住宅新聞 12・7・3よ

り